

悲劇の經驗に於ける〈τὸ θαυμαστόν〉の問題

—Aristoteles. Poetica 1452a1~6—

松尾大

序

『詩学』第九章 1452a1~6 に於けるアリストテレースの言葉の解釈が本論文でなされる全てのことである。

第一章 原典、邦訳、基礎的註解

一 原典と邦訳

先ず当該箇所 の 原典 と 邦訳 を 提示 する。

ἐστὶ δὲ οὐ μόνον τελείας ἐστὶ πρᾶξεως ἢ μύθου ἀλλὰ καὶ φθβεσθῶν καὶ ἐνεσθῶν, ταῦτα δὲ τριεταί:

悲劇の經驗に於ける〈τὸ θαυμαστόν〉の問題

kai mikista [kai mallon] ouden rephrai para tēn dōsan di' allēlia' tō raio thaumatōn oītos ēsti mallon ēi apo toū autōmatou kai tēs tūxēs,⁽¹⁾

「扱て、悲劇は全き行為の再現であるのみでなく、恐れと憐みを引き起こす出来事の再現でもあるが、こういう出来事は、予期に反した仕方、しかも互いに原因、結果という関係によって結ばれて生ずるとき、最も顕著に生ずる。なぜなら、そのような仕方では生ずる方が、偶然及び偶運からの場合よりも、驚嘆すべきものを一層多く持つことにならうから。」

二 原典批判

52a3 の *kai mallon* は、A B 両写本に見られるが、削除するのが適當と判断する。

52a3 の *mikista* をタイヒミューラーは *kakista* と校訂している。⁽²⁾ そう読めば、この部分からは何の問題も生じないことになる。しかし論者は、この部分の正しい読みを写本が伝えているという前提のもとに以下の論考を行なう。

三 文法的註解

52a1 *ēnei tē a10* の *ōare* で結ばれてゐると解する。従つて a3 の *de* を *apodotic* とはならぬ。⁽³⁾

四 文脈的理解

当該箇所に行先する部分の議論は、全体として、出来事の有意味的連鎖關係に収斂されてきた。しかるに、それだけでは喜劇に対する悲劇の種差を作らないが故に、悲劇である為の条件として、恐れと憐みという感情効果がここで提示される。従ってこの箇所は、『詩学』の論述全体の一つの大きな分節点を成す⁽⁴⁾。

他方、この箇所の直後には「なぜなら、偶運からのものうちでも、意図的になされたかのように見えるものが最も驚嘆すべきものであるように思われるからである。」という言葉が続き、その例としてミテュスの話が出される⁽⁶⁾。この部分の論述は偶運(τυχη)からのものに関わり、それは *οἱ ἀλλήλια* ではないから、厳密にはエルスの言う如く括弧に入れたところであるが、しかし *οἱ ἀλλήλια* でなくとも、そう「見える」だけで *δαυματον* を得るといふことから、間接的に *οἱ ἀλλήλια* の力を例証するものであるというルカスやハーディソンの考えを容れば辻褄は合う^(6a)。そう考えるならば、52a5 の *οἱ τῶν τῆν δόξαν οἱ ἀλλήλια* のうちでも特に *οἱ ἀλλήλια* を内容的には承けてゐることになる。

五 他の箇所との照応——『詩学』内部——

52a4 *οἱ ἀλλήλια*: この句が筋の各部分間に成り立つ因果關係を指すことは、続く第十章 52a21¹ 即ち post hoc, ergo propter hoc の虚偽を指摘する箇所²で、因果系列が *διὰ τὰς*、時間系列が *μετὰ τὰς* と

悲劇の経験に於ける *τὸ δαυματον* の問題

言い分けられ、前者が「先行する出来事から必然性又は蓋然性に則して生ずることになる」場合として説明されていること、その典型的なあり方が、主人公が「過失を原因として(δὲ ἀναγνώριαν)」没落することであることから明らかである。

52a4 παρα τὴν δόξαν δὲ ἀλλήλων: 第十一章 52a23 の καθ' ἄκρον εἰρηται がこの句を承けると解すれば無論であるが、仮にそう解さぬとしても、この句が内容的にヘリベテア ηεραπέτεια とアナグノーシス ἀναγνωρίσας、従って「複雑な筋」に言及していることに変わりはない⁽¹⁷⁾。アナグノーシスの説明中に γὰρ ἐξ αὐτῶν τῶν παρημάτων, τῆς ἐκπλήξεως τῆρροίενης δὲ εἰρήτων⁽¹⁸⁾ とうう、内容的にこの句に近い語句があることはその証拠の一つである。但し、ヘリベテアはともかく、アナグノーシスには、何ら動機づけられない種類もあるから、δὲ ἀλλήλων の部分を除いた παρα τὴν δόξαν のみがアナグノーシスに対応していると見ることができよう。

六 他の箇所との照応——『詩学』以外のアリストテレースの著作——

52a5—6 ἀπὸ τοῦ αὐτομάτου καὶ τῆς τύχης: 偶然 (τὸ αὐτόματον) と偶運 (τὴ τύχη) は、共に付帯的な物事の原因であるが、『自然学』では、τύχη が行為の帰せられる人間にのみ認められるのに対し、αὐτομάτου は一層包括的で、広く生物そして無生物にも見出されるとして区別されている⁽¹⁵⁾。しかし乍ら悲劇が人間の行為の再現である以上、実質的には確かにバイウオーター、ブッチャーの言う如く両者は同⁽¹⁶⁾

義的に用いられていると見てよからう。

七 解釈史

この箇所、特に *κατά τῆς δόξης δι' ἀληθεία* という句は、エルズが『詩学』の鍵と見做し、ブッチャーによって、感情が普遍化されるという彼のカタリシス解釈の典拠とされるなど、伝統的に注目されてきた。¹⁷⁾

第二章 悲劇に於ける「知」の相関者と〈τὸ εἶκός〉

扱てアリストテレースは『詩学』第四章に於いて、藝術一般の発生因の一つとして「知ること」(*μαρτυρεῖν*)の喜びを挙げ、再現 (*μίμησις*)の所産たる *μίμημα* によって人々は何かを知るが、知ることは人々にとって最も快いものである¹⁸⁾。彼は、或る対象を描写した「似像」(*εἶκόν* 481b)を例にとり、それを「観照する人々は『ここに描かれているのはあの男だ』というように、各々のものが何であるかを知ること、推論することになる」(*συμβαλεῖ θεοποδῶν μαρτυρεῖν καὶ συλλογισσοῦν τὴν ἐκαστον, ὅταν ὄπῃ αὐτὸς εἴδειν*)¹⁹⁾と説明する。無論、発生に於いてそうであったからといって直ちに藝術一般に一つの知をもたらす力を帰することはできぬのではないかという反論が出よう。しかしアリストテレースが、

詩の發生因たる認識の喜びの存在する証拠として現在の人々の經驗に訴えている (cf. 48b10 ἐπὶ τῶν ἔργων) 以上、知ることが藝術經驗一般を、従つて悲劇の經驗を構成する本質的契機の一つであるとアリストテレスが考えていたことに疑いはない。⁽²⁰⁾ 藝術が快を与える理由について『修辞学』でアリストテレスが行なっている説明もそれと軌を一にしている。

「なぜなら、再現された対象自体によって喜びを得るのではなく、これがあれだという推論があつて、その結果何事かを知るといふことが生ずるからである。」(ὅς τὰς ἐπὶ τοῖς ἡαίροις ἀλλὰ συλλογισμῶς ἔστιν ἐπὶ τοῖς ἐκείνοις, ὅστε μάθησθαι τι συμβάλλει.)⁽²¹⁾

では、藝術一般、特に悲劇の經驗において聴衆は何を知るのであろうか。悲劇による知の相關者は何か。その答えは第九章の次の言葉から導かれる。

「既に述べられたことからして、起こつたことではなく起こりうること、蓋然性又は必然性に則して可能なことを語ることに、それが詩人の仕事であることは明らかである。」(Θαυροῦν δὲ ἐκ τῶν εἰρημίων καὶ ἐπὶ οὐ τὸ τὰ γενομένα λέγειν, τοῖς ποικίλοις ἔργοις ἐστίν, ἀλλ' οἷα αὖ γινώσκοντες καὶ οὐκ ἀναγκαῖα τὸ εἰκός ἢ τὸ ἀναγκαῖον.)⁽²²⁾

ここからして τὸ εἰκός と τὸ ἀναγκαῖον が悲劇による知に対して重要な意義を持つことが推定される。この兩者のうち『詩学』に於いて特に重点が置かれているのは εἰκός である。

εἰκός については、それが存在と生成の三つの様相のうちの一つであることを先ず想起しておかねばな

らない。アリストテレスによれば、詩の再現対象は「出来事」(παράστασις)から成るが、「出来事のうちあるものは必然によって存在し、あるものは多くの場合に存在し、あるものは偶々存在する」(Επειδή οὐ τῶν παρὰ μᾶλλον τὰ μὲν εἰς ἀνάγκην εἶναι, τὰ δ' ὧς ἐπὶ τὸ κοινόν, τὰ δ' ἄπρόσπευτον ἐτύχουσι.)⁽²⁵⁾。

これらのうち第三のもの——それは「偶運からのもの」(τὸ ἀπὸ τύχης)とか「偶発的なもの」(τὸ συμβεβημένος)⁽²⁶⁾とも呼ばれるが——に関しては、何ら普遍的な判断をすることはできない。その「理」(λόγος)⁽²⁶⁾、「学」(ἐπιστήμη)⁽²⁷⁾、「観想」(θεωρία)⁽²⁸⁾はありえない。これに対し、必然によるものは無論、多くの場合にあるものについても、帰納、抽象を介して「多くの場合に生ずること」(τὸ ὧς ἐπὶ τὸ κοινόν τυγχάνουσαν)を命題化しうる。この「多くの場合に生ずること」(を言表する命題)⁽²⁹⁾が τὸ εἰκότωςである。このように τὸ εἰκότως は普遍的命題であるから、個別である「他の仕方でありうるもの」(τὸ εἰδόμενον διὰ τὸ εἰκότως ἔχειν)⁽³⁰⁾とは同一でなく。前者と後者はいわば「普遍と特殊の関係にあり」、従って後者「に対して」(πρὸς)前者が述語つけられる⁽³¹⁾。

τὸ εἰκότως の対象である「他の仕方でありうるもの」の中心をなすものは人間の行為である⁽³²⁾。われわれが「思慮する」(βουλευόμεθα)のは「多くの場合にそうであるが、しかしどのような結果になるか不明であり、未定の要素を含むもの」⁽³³⁾についてである。われわれの生活は大体かかる蓋然性への信頼の上に成り立っている。従って、人間のする事柄一切に関する学として倫理学と狭義の政治学を包摂する「政治学」(πολιτική)は、かかる εἰκότως を対象、出発点、終局点とする⁽³⁴⁾。

以上は *eikos* についての一般的なことどもであるが、特に悲劇に於ける *eikos* については、なおつけ加えるべきことがある。前述の「蓋然性又は必然性に則して可能なことを語る」⁽³⁵⁾ という言葉は、必然、蓋然、偶然という三つの様相をそれぞれ持つもののうち、アリストテレスは偶然的なものを除き、*eikos* と *avaraktos* を並べて、⁽³⁷⁾ 詩人の語る対象として認めたとすることを意味している。「詩人は普遍的なことと (*to katholou*) を一層多く語る」⁽³⁸⁾ という周知の言い方も、普遍的命題である *eikos* や *avaraktos* に則して出来事を語ることを解しうる。

ところで *politikē* に於いて *eikos* は命題の形で取り扱われるのに対し、*politikē* に於いては、単発的出来事の蓋然性としてよりも、むしろ人物の性格と言動、又は出来事同士の因果連関として再解釈されている。⁽³⁹⁾ つまり一般に「AはBの傾向がある」という形に書ける *politikē* 的 *eikos* を、Aを前件、Bを後件とした合意関係に書き換えた「Aが生じた、その結果Bが生じた」という *politikē* 的 *eikos* に書き換えうる。確かに例えば「妹が犠牲に捧げられた者は自分も同じ運命に遭うと考える」というオレスティスの言動が *eikos* と名づけられている如く、一つの出来事自体の蓋然性を *eikos* が指すときもある。しかし勝義の *eikos* が因果連関に関わることを次の言葉がよく示している。

「性格に於いても、出来事同士の組み立てに於けると同様、常に必然性又は蓋然性を求め、しかしかの人がしかしかのことを語ったり行なったりするのは必然的であるか蓋然的であるかしなければならぬし、一つのことのあとに別のことが生ずるのも、必然的であるか蓋然的であるかしなければならぬ。」⁽⁴⁰⁾

ὅτι καὶ ἐν τοῖς ἡθεσιν ὁμοίως ὡς ἐπὶ καὶ ἐν τῇ τῶν παρυμῶν συντάξει ἀεὶ ἔγρηθ' ἢ τὸ ἀναγκαῖον
ἢ τὸ εἰκόσ, ὡς ἐπὶ τῶν τοιοῦτων τὰ τοιαῦτα λέγειν ἢ ποιεῖν ἢ ἀναγκαῖον ἢ εἰκόσ καὶ τοῦτο μετὰ
τοῦτο ἴσως θάη ἀναγκαῖον ἢ εἰκόσ.)⁽⁴¹⁾

このように、*eikos* の働き方は *poietikē* と *poietikē* とでは異なる。他方その内容について見るに、
性格と言動の連関、及び出来事同士の連関とどう *poietikē* での *eikos* の二形式のうち特に前者は行為
の学としての *poietikē* の *eikos* と重なることが多⁽⁴²⁾。

この中で *eikos* (又は *anarkaton*) に則した筋の各部分の構成は、われわれの元々の問題である箇所
(52a1—6) に於いては *di' alhthia* に対応することと明らかである。何故なら *di' alhthia* とは、筋の各部
分が互いに原因、結果の関係によって結ばれていることであつたからである。しかるに、物事の「何であ
るか」(*ti ēsti*) を問うことがその「何故であるか」(*di' alhthia*) を問うことに等しいならば、結局の
ところ、筋の、より後の部分の原因として、より前の部分を知ることが、「各々のものが何であるかを知
ること」推論すること」(48b16—17)になる。藝術経験の本質的契機である知の相関者は、従つて、*eikos*、
anarkaton 関係でとり結ばれた、或る物事の原因であることになる。そしてアリストテレスの観方では、
原因の認識こそが勝れた意味に於ける認識である。⁽⁴⁴⁾

われわれは次に、何故 *eikos* が悲劇に於ける知にとつてかかる重要な意義を有するのかを考えてみる
ことができる。*eikos* は、それをアプリアリナカテゴリーととるにせよ、過去の経験の総体から帰納的に

導出せられた平均値的期待（若しくは期待の束）をとるにせよ、われわれにとつて受け容れやすいもの、或るいは少なくとも理解しやすいものであると言ふことはできよう。アナグノーリススの種類を扱ふ『詩学』第十六章に於いて、「*eikōs*を介した」（*δι' eikōnaw. 55a17*）アナグノーリススが、「こしらえものの」（*πεπονημέναι, 54b30—11*）アナグノーリススに對置せられていることは、*eikōs*が一種の自然性に根ざすことを示している。因果論的思考方式は根強くわれわれの本性に浸透している。この意味に於いて *eikōs* は、よく知られたこと、*vertraut* なことであり、その限りで藝術経験に於ける知には「再認」（*Wieder-erkennen*）という面が含まれる。それ故に、*eikōs* は又「納得のいくこと」（*το πιθανόν*）として機能し、⁽⁴⁶⁾ それに一種の説得性が帰せられてくる。以上われわれは *eikōs* が理解、了解の容易なもの、受容の抵抗が小さいものであることを確認した上で、再びわれわれの問題としてゐる箇所に戻る。

第三章 *eikōs* 概念に基く原文の読解及び問題提起

1 *φοβερὰ καὶ ἐκτενὰ*

52a2—3の *φοβερὰ* と *ἐκτενὰ* とは、筋の構造とは一応切り離された、それ自体として「恐ろしいこと」「憐むべきこと」「即ち聴衆にこの両感情を引き起すものである。では、かかる恐れと憐みが生ず

る為の基礎条件は何であろうか。われわれがいかなる対象に恐れと憐みを抱くかについてアリストテレスは、

「憐みは、それに値せぬ不運に遭いつつある人に対してであり、恐れは、われわれに類似した人に対してである。」(ó miu rão pãtã tou ándrãtou êrtou tharuyãdura, ó ðẽ pãtã tou thãrou)⁽⁴⁷⁾

と言っている。先ず恐れについて見るに、現実の生活では恐れは実際にわれわれの近くに破壊的な危険が迫っているときに生ずるが、⁽⁴⁸⁾悲劇の経験に於いては事情を異にし、主人公への聴衆の共感及至彼との一体化を介して生ずると考えられる。⁽⁴⁹⁾他方、憐みは、誰かがそれに値せぬ不運に遭ったという認識から生ずる。⁽⁵⁰⁾即ちこの場合には原因と結末の間に一種の過不足が存在している。⁽⁵¹⁾それ故、*andron* という言葉には既に *paradox* 的契機が——*ẽta* の *pãtã tou ðõũau* と同じものではないにせよ——含まれている。例えば、肉親間で殺人が生ずる場合、恐れと共に憐みが生ずるが、⁽⁵²⁾それは善が予想されるところから悪が生ずるといふ、一種の *paradox* 的契機を含むからである。⁽⁵⁴⁾

こういう次第であるから、『詩学』に於いて恐れと憐みは、対象、状況の知的認識を基礎条件として生ずると考えられていると言えよう。

II *pãtã tou ðõũau ði' ãlãlãta*

この憐みと恐れは、*pãtã tou ðõũau ði' ãlãlãta* であることよって強められるとアリストテレスは

悲劇の経験に於ける〈*to thaumaston*〉の問題

言う。順序として先ず、かかる条件自体に關して生ずる問題を指摘せねばならない。 *κατά τῆν δόξαν* *οἱ ἀλλήλα* という全体のうち、『詩学』に於いて一貫して要求せられる *εἰκός* (と *ἀναγκαῖον*) の条件に対応するのは、*οἱ ἀλλήλα* の部分であることをわれわれは既に見たが、では残りの部分である *κατά τῆν δόξαν* と *εἰκός* とはどのような關係にあるのか、と問うてみなければならぬ。 *κατά τῆν δόξαν* とは「予期に反した仕方で」ということであるから、それは、予定若しくは予想せられた経過を方位づける因果系列による秩序を破るものであり、従つて *εἰκός* 即ち蓋然性に対する挑戦である。*εἰκός* が受容、理解の容易なものであるならば、*κατά τῆν δόξαν* は事態の推移に対する予期の失効として、理解し難いもの、説明し難いものという面を持っている。エルズがそれらを「両立し難い二つの世界」と呼ぶのは正し⁽⁵⁵⁾。従つて、全体として *κατά τῆν δόξαν οἱ ἀλλήλα* という条件は、*εἰκός* とそれに相克するものとの兩契機から成り、「非蓋然的な蓋然的なもの」という *oxymoron* 的外觀を呈している⁽⁵⁶⁾。この矛盾はいかに解消されうるか——これがわれわれの第一の問題である。

加うるに、憐れで恐ろしい出来事は、*κατά τῆν δόξαν οἱ ἀλλήλα* という条件が成立するとき最も多く生ずるとされる。普通には *οἱ ἀλλήλα* を、即ち出来事の原因を知ることが恐れと憐みを多少なりとも軽減すると考えられるのに⁽⁵⁷⁾、それは何故であろうか。これがわれわれの第二の問題である。第一の問いが *κατά τῆν δόξαν οἱ ἀλλήλα* 自体に關わるのに対し、この問いはそれと *φοβερὰ καὶ ἐλεεινὰ* との關係に關わる。

III τὸ τὰρ θάυμαστον οὕτως ἔσται

2112b τὰρ τῆν δόξαν δι' ἀληθῆα が憐みと恐れを強める理由として (cf. τὰρ 524a) アリストテレスはそれが τὸ θαυμαστόν を持つ 112b を挙げてゐる。即ち τὸ θαυμαστόν は φοβερὰ καὶ ἐλεεινὰ と τὰρ τῆν δόξαν δι' ἀληθῆα をつなぐ論理中項として機能している。それ故必然的に、上述の第二の問いは、何故 τὰρ τῆν δόξαν δι' ἀληθῆα が τὸ θαυμαστόν を多く持つのか、及び何故 τὸ θαυμαστόν が恐れと憐みを増量させるのか、という二つの問いに還元される。

1112c τὰρ τῆν δόξαν δι' ἀληθῆα に含まれる両契機のうち τὰρ τῆν δόξαν が τὸ θαυμαστόν に通ずることは容易に理解しうる。予想外のものにわれわれは驚くからである⁽⁵⁸⁾。テクスト的に言っても、『詩学』に於けるその語の唯一の用例である 56a20 の θαυμαστόν を、詩人——ここではアガトーン——の技量への讃嘆でなく、詩人として彼が語る対象面に関係つけてよいとするならば、その対象についてはすぐあとの部分 (56a21—23) に於いて、シーシュポスの如き、知恵はあるが邪悪さを持つ男が欺かれたり、勇猛だが不正な男が敗れるという、その言葉を借りれば「蓋然性に反した」(τὰρ τὸ εἰκόσ. 56a25) 出来事が語られていて、当然それを θαυμαστόν と関連つけてよからうから、或る種の意外さを持つ結果——因果連関があるうとなからうと⁽⁵⁹⁾——が τὸ θαυμαστόν に通じると解釈してよからうと思う⁽⁶⁰⁾。(もっともこの場合には、paradox 的ではあるが、恐れと憐みは、前述の基礎条件そのものを欠いている為生じな

これに対し、もう一方の *di' alhnia* という契機は *to Bauuatoú* と相克するように見える。何故なら *to Bauuatoú* は *to aliorou* を介して最も多く生ずるが、後者は *to eikos* の矛盾概念である。⁽⁶¹⁾ しかるに前述の ミテュスの例は *para tñ doúau di' alhnia* のうち特に *to Bauuatoú* を生むのに寄与するのは *di' alhnia* の契機であることを示している。⁽⁶²⁾ 従って *di' alhnia* という *to Bauuatoú* と相克するように見えるものが、それを滅殺せぬばかりでなく、却ってこれを増量せしめ、かつ *dogbera kai theoua* を最も効果的なものとして生ぜしめる原因とされているのは何故か、という問いはやはり答えられないままである。

この問題に答えうるのは *to Bauuatoú* 乃至主観の側でそれに相関する *Bauuátesu* (驚嘆すること) の構造、成立条件を解明しえたときである。しかるに、経験に対する *to Bauuatoú* の作用の分析は『詩字』に於いてはあまりなされていぬ。『詩字』に於ける *Bauuatoú* の用例は、われわれの問題とする *Ba1-11* 以外では僅かに第二十四章に三例が見出されるのみで、⁽⁶³⁾ しかもそこでの文脈が *aliorou* との関連でのみ考察するものであるから、*para tñ doúau* には関係するものの、われわれの問題とする *di' alhnia* との関連は語られないままである。従ってアリストテレスに於ける *to Bauuatoú* の語義圏について一層包括的な視野を得る為には、彼の他の著作から *Bauuatoú* 論を再構成しなければならぬ。

第四章 アリストテレースの *Θαυμαστόν* 論の再構成

一 タイヒミュラーの分析

アリストテレースの *τὸ θαυμαστόν* に関しては、タイヒミュラーがパーゼル大教授に就任した直後に公刊した著作に精細な分析があるが、彼は *τὸ θαυμαστόν* に、一、常態逸脱 (*ἐκταρασίς*)、震憾 (*ἐκρήγξις*) と、二、常態回復 (*κατάτασις*)、快 (*ἡδονή*) と、三、二つの段階を区別する⁽⁶⁴⁾。彼による *θαυμαστόν* 概念の分析は、「論理的驚き」(Das logische Staunen)、「讚嘆」(Das Bewundern)、「对象的崇高」(das objektive Erhabene)の三領域に互って行なわれるが、今の二段階はこれらに共通に認められるもので、第一段階の *ἐκταρασίς* とは、「習慣的で通常の現象に反するもの」⁽⁶⁵⁾に直面してわれわれが陥るアポリアの状態であり、それには不快感が伴い、自然な状態へ復帰しようとする欲求が生ずる。第二段階の *κατάτασις* は、驚きの解消に相当し、知を介した本性的状態の回復である。然るに、快とは「通常そのようにある本性への、一気になされる、感覚されうる常態回復 (*κατάτασιν ἀσποῦν καὶ ἀλοθιτην εἰς τῆν ἀτάραχον φῶρον*)」⁽⁶⁶⁾であり、「本性に即した状態へはいつていく」とは、多くの場合快⁽⁶⁷⁾ (*ἡδὴ εἶναι τὸ τε εἰς τὸ κατὰ φῶρον εἶναι ὡς ἐπὶ τὸ πᾶν*)⁽⁶⁸⁾のであるから、この *κατάτασις* の段階は快を伴う。

二 『形而上学』に於ける θαυμάζειν

この兩段階が截然と分かれているのは、 θαυμάζειν の第一の意味である「驚き」に於いてである。プラトーンもそうであるが、アリストテレースも θαυμάζειν に哲学の始まりを見る。

「何故なら、驚異することを介して、人間は今も最初のとくも知恵を希求し始めたからである。」(ὅτι τὰ τοῦ θαυμάζειν οἰκονομοῦνται καὶ οὐ καὶ τὸ πρῶτον ἠγάγαντο φρονήσειν)⁽⁸⁸⁾

かかる驚異の対象をアリストテレースは「場を外れたもの (τὰ ἀτομά)」⁽⁸⁹⁾と呼ぶ。それのあるべき場所に落着いていないもの、常態を逸脱したものが驚異を呼ぶ。その例は、正方形の対角線の長さの非通約性である。

「最小のものでも測りえぬものがあることは、その原因 (αἰτία) をまだ知らぬ全ての人々に驚嘆すべきものと思われ。」⁽⁷⁰⁾

当面の理解を拒むこのような対象に主観の側で対応する態度は ἀνοησία⁽⁷¹⁾ 即ち解決を見出せない「困惑」である。

「彼らのはかかる無知の状態から脱却するために知恵を希求した。」⁽⁷²⁾

われわれの心のうちに生じたかかる常態からの逸脱は、常態への復帰を希求する。丁度風によって水面に生じた傾きが再び水平化せられねばならぬように。⁽⁷³⁾

「その学の獲得は、何らかの仕方、始めの探求とは反対の状態にわれわれを常態復帰させずにはおかない。」(Dei métrou pōs katasthanai tūn kthōn autōn eis toūvratōn hēmō tōn eis aōxēs gēthōseōn)⁽⁷⁴⁾
「この「常態復帰させる (kathisthēmi)」という語は、タイヒニユラーが正しく指摘する如く⁽⁷⁵⁾ esthēmi (エクスタシスへと置くこと)の反対語である。かかる常態は、*dauidazeu* の状態に比して「一層よい状態 (to dūshōn)」⁽⁷⁶⁾である。この状態では、かつて *dauidarōn* であったものがもはや *dauidarōn* ではなくなる。

「もし正方形の対角線が一边で測りうるものになるとしたら、逆に幾何に通曉した者がそれほど驚嘆することはありえぬであろう。」⁽⁷⁷⁾

こうして *dauidazeu* の消失が、価値的に上位の状態への回帰となる。⁽⁷⁸⁾ この回帰が *laudazeu* (知ること) ⁽⁷⁹⁾ である。従って、アリストテレスによるこの説明は、*dauidazeu* と同時に *laudazeu* 一般の構造をも説明しているが故に、われわれにとつての基本的前提として機能する。

一般に知の経験は、未知のものを既知のものへ一定の観点に於いて関係づけ、知識の地平へ組み込むところに成立する。アリストテレスはこの事態を、われわれの知は「われわれにとつてより多く知られたもの」を介して、「自然に於いてより多く可知的なもの」へ進むとき成立すると記述している。⁽⁸⁰⁾ 然るに、未知のものの探求へわれわれを動かす力は、所与の対象、事態に対してわれわれが先ず抱く一種の違和感である。そして所与が既存の知識体系に組み込まれたとき知が成立する。従って知は課題の解決という面

を多かれ少なかれ持つ。無論アリストテレースが *τὸ θαυμάζειν* を、制作的知から哲学的知を分ける指標にしていること(81)から理解される如く、*θαυμάζειν* は強いアポリアの状態であり、必ずしも知一般の前提であるわけではない。しかし乍ら、知が無知から既知への転位である以上、その前段階としての無知の状態を小さな *ἀποπειρά*、従って小さな *θαυμάζειν* と見做すことは可能であろう。

三 『修辞学』に於ける *θαυμάζειν*

『形而上学』の説明から読み取りうる限り、*ἐκτασθῆναι* と *κατασπασθῆναι* は、それぞれ時間的に懸隔して生ずる二つの出来事である。難問の解決は *θαυμάζειν* からいくら遅れてもよい。換言すれば、*θαυμάζειν* の時点ではそれは全く予期せられぬのが通常である。

ところでアリストテレースは『修辞学』に於いても *θαυμάζειν* を知の契機と結びつけて説明するといふ基本線を崩していない。

「そして知ることも驚異することも多くの場合快い。なぜなら、驚異することのうちには知る欲求が存し、その結果驚異されるものは欲求の対象である。然るに知ることのうちには、本性に即した常態への回復があるからである。」(*καὶ τὸ μαυθαίνειν καὶ τὸ θαυμάζειν ἦδὲ ὡς ἐπὶ τὸ κοινὸν ἐν μὲν γὰρ τῷ θαυμάζειν τὸ ἐπιθυμῆναι μαθεῖν ἔστιν, ὥστε τὸ θαυμαστὸν ἐπιθυμητὸν, ἐν δὲ τῷ μαυθαίνειν εἰς τὸ κατὰ φύσιν καθίστασθαι.*)⁽⁸²⁾

ここでは『形而上学』で析出された〔*Davidiceu*——知欲——知||本性的状態への復帰——快〕という因果系列が基本的に保持されている。しかし乍ら、『形而上学』に於いては、*Davidiceu* 自体には快が帰属しないのに対し、ここでは *Davidiceu* 自体が快いとされていると、どう違が見られる。

次いで *Davidiceu* や *Davidiceu* の対象が例示される。

「又、知ることも驚くことも快いから、そのようなことの対象も快いものでなければならない。例えば、絵や彫刻や詩のような再現や、よく再現する一切のものは、たとえ再現された対象自体が快くなくとも、快い。なぜなら、再現された対象自体によって喜びを得るのではなく、『これはあれだ』という推論があつて、その結果何事かを知ることが生ずるからである。そしてヘリペティアと髪一重で危険から救われることも快い。それらは全て驚くべきことでもあるから。」(Étrei de tò *Davidiceu* te hòu kai tò *Davidiceu*, kai tà toiaòe ànàrken hòea einai, oíou tò te *Michobiceu*, ósteo *Trachikè* kai àndro-avropoia kai *porrakenè*, kai pán ò àu eù *meimimènon* ñ, kán ñ *μη* hòu àutò tò *meimimènon* òò rap ènì tòurq *chaires*, àllà ouloyoromòs èrtu òti toúto èksèno, óste *Davidiceu* ti *symbabèe*, kai ài *pegrèteia* kai tò *parà* *Michou* ówçòðau èk tòu *kinòuou*)⁽⁸⁸⁾

『形而上学』では *Davidiceu* や *Davidiceu* の対象は、自然や幾何学的なものの領域に存在するとされたの対し、ここではむしろ藝術にそれが求められている。かつ再現 (*tò Michobiceu*) としての藝術が快を与える理由についての説明は、既に述べた『詩学』第四章のそれと軌を一にしている。

悲劇の経験に於ける *tò Davidiceu* の問題

但しこゝで *δαιμαστόν* と呼ばれているのは、原典を普通に読めば、「そしてペリペテイアと……」以降の部分であり、藝術一般が *δαιμαστόν* であるとはされてはいない。藝術に於いて *δαιμαστόν* が語られるのは『修辞学』でも第三卷になってから語法 (*ὁδὸς λέξεως*) つまり措辞 (*ἰσότης*) の問題としてである。「それ故語法を外來風にしなければならぬ。なぜなら人々は遠く離れているものを驚嘆するが、驚嘆すべきものは快いから。」(*ὁδοὶ δὲ τοῦ δαιμαστόν ἐστίν· ἵδιον δὲ τοῦ δαιμαστόν ἐστίν.*)⁽⁸⁶⁾

εὐνοῦς とは *εὐνοῦτος* と同じく、通常の言い回し (*τὸ εὐνοῦτος*) からはずれた一切のものを指す。⁽⁸⁵⁾ 日常的なものからの距りが *δαιμαστόν* の必要条件である。しかし遠く離れたものうちでも、稀語、^{ゲロンツァ} 重台語、^{ダイアブラ} 新造語は明瞭さを欠く。⁽⁸⁶⁾

「そして隠喩が明瞭さも快きも外來風も最も多く持っている。」⁽⁸⁷⁾

自明なもの、近いものと、不明なもの、遠いものの中に隠喩は位置する。

「容易に知ることは本性上全ての人に快い。然るに語は何かを指す。その結果、語のうちわれわれに知を与えるものが最も快い。さて稀語は知られざるものであり、逆に固有語をわれわれはもう知っている。

これに対し隠喩が最も多く知を与える。つまり老年を『刈り株』と言ふとき、類を介して知と認識を与えるものである。」(*τὸ γὰρ μακρὰν ἐπέκεινται ἵδιον φήσεται πᾶσι ἐστίν, τὰ δὲ ἀνοήματα σημάθει τῆς, ὥστε ὅσα τῶν ἀνοήτων ποιεῖ ἴδιον μακρῶν, ἵδιον ἐστίν. αἱ γὰρ οὖν γινώσκται ἀνοήτως, τὰ δὲ κῶμια ἴδιον*

ἡ δὲ μεταφορὰ ποιεῖ τοῦτο μάλιστα ὅταν τὰρ εἴη τὸ ἦθος κακὸν, ἐποίησεν μέθυσεν καὶ
ἴθυσεν δὲ τὸν ἴθυσεν.⁽⁸⁸⁾

こゝでは隠喩の一、基本的構造、二、成立条件、三、機能が語られている。

第一点、隠喩の基本的構造は、或る事物(こゝでは老年)を本来指す(σημαίνει)語に代えて、別の語(こゝでは「刈り株」)をそこへ移してくることである。⁽⁸⁹⁾「これがあれであると言う(λέγει εἰς τοῦτο ἐκεῖνον)」隠喩を受け取ると「心(φύξις)」は「これ」即ち「指されるもの(τὸ σημαζόμενον)」⁽⁹²⁾が何であるか、或るいは又両項の類似点が何であるかを「探求する(ζητεῖ)」⁽⁹³⁾。

第二点、かかる探求が成立する為には隠喩は「ありふれた(ἐπιδημιότατος)」⁽⁹⁴⁾ものではならぬ。それは「何の衝撃も与えないからである(οὐδὲν τὰρ ποιεῖ πικρῶς)」⁽⁹⁵⁾。他方、両項を「共に見る」ことが困難(κατακρίνειν)「なほ不明でもいけぬ」。既述の如く日常的なものからの距りが θαυμαστόν の必要条件であるが、隠喩の場合その距りは転移(μεταφορὰ)の大きさに相関する。そしてその大きさは過大でも過小でもいけぬ。

第三点、この両条件が充たされるとき、隠喩は「容易な知(τὸ μαθητῶν ἐπιδημιότατος)」⁽⁹⁶⁾を与えるという機能を持つ。「隠喩は類似性を介して、指されるものを何らかの仕方で認識せしめる」⁽⁹⁶⁾。換言すれば「刈り株」という眼前のものが、老年という既知のものに関係づけられる。

アリストテレスは隠喩にとどまらず、弁論の諸要素のうちで快(τὸ εὐχάριον)を与えるものの原因を、こ

のような「容易に知ること」に求めている。弁論を措辞 (*κατὰ τὸν λόγον*) と意味内容 (*ὁὐσιαστικὰ*) という二面に分けて考察するのは古代修辞学体系の常であるが、アリストテレスは、先ず *ὁὐσιαστικὰ* の面で快を与えるものについてこう言っている。

「それ故、エンテュメーマのうちありふれたものも (ありふれたものというのは、どの人にとつても自明なもので、それを何ら探求する必要がないものである)、又言われたときわからないものも好評を博さない。⁽⁹⁸⁾」

次に *κρίσις* は更に *ὀρθότης* と *ὀρθότης* に分割されるが、そのうち *ὀρθότης* に於いては、対句がそれにあたる。

「さて語られることの意味内容^{ディイアノイア}についていえば、エンテュメーマのうち以上のようなものが好評を博すが、措辞^{レクシス}についていえば、先ず姿の点^{スケーマ}では、対置的に語られている場合である。⁽⁹⁹⁾」

そして *κρίσις* のうちでも *ὀρθότης* に於いては隠喩が挙げられる。

「これに対し、名詞の点で好評を得るのは、隠喩を持つ場合である。⁽¹⁰⁰⁾」

このようなエンテュメーマ、対句、隠喩は全て「容易に知ること」の相関者であるが故に快い。隠喩、エンテュメーマの場合は、それらが指すものが自明と不明の間者であるという意味論的次元^{セマンティック}に基く知り易きであり、対句の場合は、それ自体知覚しやすい構造をしているという統辞論的次元^{ウニオンクワイア}に基くそれであるが、いずれにせよ、かかる知り易さが知一般から快の原因となる知を分ける種差を成す。

さて、かかる知り易きは、いわば時間を捨象して事態を観察したとき認められるものであるが、時間の観点を入れて観るとき、それは知の「速さ」として語られる。

「だから措辞もエンテュメーマも、われわれにすばやい知を与えるものが洗練されたものである筈である。……エンテュメーマのうち好評を博するのは、語り終えられると同時にその認識が生ずるもの（たとえそれ以前には生じなくとも）、又は理解が少しそれに遅れるものである。」(ἀνδρική δὴ καὶ λέγειν καὶ ἐπιθυμητάτα τὰδ' εἶναι ἀρετὴν ὅσα ποιεῖ ἡμῖν μάθῃσιν ταχέϊαν…… ἀλλ' ὅσων ἢ ἀμια λεγόμενων ἢ ἔνθεος ῥυθεταί, καὶ εἰ μὴ πρότερον ἐνηγορεν, ἢ μικρὸν διατερίξει ἢ δεινότερα)⁽¹³⁾

自明でないエンテュメーマに直面した人はその結論を予期的に探求する。そして語り終えられると同時に又は殆んど同時にそれを理解することができる。マウに「速く知(μάθησις ταχέϊα)」が生ずる⁽¹⁴⁾。

同じ事態は第二巻でも語られている。

「しかるに、論駁的及び立証的推論全てのうちで最も拍手喝采を受けるのは、始まるとそれがありふれたものでないことを人々が予見するようなもの(というの)は、自分らも同時にそれに予め気づき、自分ら自身に喜びを感じるからである)、そして、語り終えられると同時にそれを認識するという程度に、その推論をとらえるのに遅れるようなものである。」(πάντων δὲ καὶ τῶν ἐλεγκτικῶν καὶ τῶν δεκτικῶν συλλογισμῶν θοροβεῖσθαι μάλιστα τὰ τοιαῦτα ὅσα ἀρχομένενα προσοδοεῖ μὴ ἐπιτολῆς εἶναι (ἀμια γάρ καὶ αὐτοὶ ἐφ' αὐτοῖς χαίρουσι πρῶτα ἐπιθυμῶμενοι), καὶ ὅσων τοσοῦτον διατερίζουσι ὡσθ' ἀμια

自明ではないが故に結論を探索し、しかし不明ではないが故にある程度それを予見する、というこの説明には、第三卷の説明にはない予見という契機が入られているが、それは対句を含むペリオドスの場合一層顕著に現われる。即ちペリオドスは構造の完結性を持つため、語られている途中で既に終わりを予知(ἡ πορεύειν)⁽¹⁰⁶⁾する。最後に、語り終えられると同時に知が生ずる。

語り終えられた時点ではじめて知が生ずるといふこの性格が特に顕著に認められるのは、隠喩のうちでも予想を裏切ることをつけ加える(ἡ ποσειστάρτα)⁽¹⁰⁷⁾場合である。例えば『さて彼は歩んだ、足に履いて、霜焼けを。』ところが聴き手はサンダルを、と言うと思っていたのである⁽¹⁰⁷⁾。人為的に一定の「予期(ὁψία)」⁽¹⁰⁸⁾を活性化し、次いで「予期に反したこと(ἡ ἀπαόσιον)」⁽¹⁰⁹⁾が言われ、その上それが真であることが、語られると同時に(ἀΐα)⁽¹¹¹⁾自ら明かになる。このとき「逆であること」の故に、知った内容が一層明らかになる⁽¹¹²⁾。それ故同じ ἡ ἀπαόσιον⁽¹¹⁰⁾でも、自ら自らを解決しえない場合、或るいは ἡ ἀπαόσιον⁽¹¹⁰⁾でないにしても不明である場合は、その論証をすぐそのあとに添加せねばならない。エンテュメーマの部分といえる格言(ἡ ἔμμη)⁽¹¹³⁾の場合にそれは認められる。

このように ἡ ἀπαόσιον⁽¹¹⁰⁾を含む場合隠喩はとりわけ強い覚醒効果を持つが、そうでない場合でも隠喩は総じて謎の性格を持つために、印象的な知を与える⁽¹¹¹⁾。なぜなら「謎の本質は、真であることを語るにあたり、結びつけえないようなことどもを互いに結合することに存する」⁽¹¹²⁾からである。隠喩は一方で、それま

で見えなかったものが見えてくるといふ或る種の眞理性を、他方で、通常は結びつけられない両項を含むといふ或る種の不可能性を有する。これは、その指示対象が自明と不明の中間者であることを意味している。

以上に於いて分析された『修辞学』に於ける *δαιματόν* の説明は、『形而上学』に於けるそれと殆ど一致している。ただ異なるのは、藝術に於ける *δαιματόν* としての隠喩の場合には、それが語り終えられるのと(殆ど)同時に知が生ずるとされていることである。⁽¹⁶⁾これは『形而上学』では時間的に隔在するとされた *ἐκταρασις* と *καταταρασις* が極めて接近して生起することを意味している。かかる *δαιματόν* 乃至 *δαιμάζειν* はそれ自体が快とされる。⁽¹⁷⁾このように本来離れている筈の *δαιμάζειν* || 不快と *παύειν* || 快を、時間を捨象して *δαιμάζειν* || 快と考えることができるのは、この兩段階が重なり合って生じていることに基く。

かかる機能の点に於ける特性に、それがそれに対する答えであるところの問いを隠喩は自己の内に内蔵しているという、構造上の特性が対応する。この意味に於いて藝術一般も、課題を唯一可能な仕方でも提出し、かつ既に解決し終えているところにその自己完結性が成り立つ以上、小さな *δαιματόν* であるといえる。藝術は、できるだけ大きな傾きを自ら意識的に作り出しつつ、また自らその度ごとに暫定的解決を与え続けていく。隠喩ではこの課題が大きければそれだけ解決も見事となり、従って知を与える力が大きいだけに、すぐれた意味に於ける *δαιματόν* である。本来結びつけ難いものを結びつけるには大きな力

が必要と考えられる。遠隔性とそれに相応する真理性の共在——それがこの種の *Saujaatoru* を特徴づける。無知であった、或るいは予期が誤っていたという、受け取り手の側での自覚を伴う *Saujaatoru* は、斯くして、一種の真理性に基く強い説得効果を持つことができる。⁽¹¹⁸⁾ 質と量の区別が知に關してここでは問題である。算術的に増量する *tohujaudia* に対し *shock* と共に刻み込まれた知はそれだけ深く刻まれる。⁽¹¹⁹⁾

Saujaatoru は従って注目をひくものに属する。⁽¹²⁰⁾

このような次第で藝術に於ける *Saujaatoru* は、何らかの意味に於いて本性の回復としての知を含むことによつて *Saujaatoru* 一般から区別される。前に挙げられた、危機一髪の例に於いても、たった今危険であつたという異常事態を、既に救われているという安定状態から *Sawaju* するところ、快なる *Saujaatoru* が生ずる。⁽¹²¹⁾ 『詩学』第二四章に於ける見慣れないもの、聞き慣れぬこととしての *Saujaatoru* を、それをそれとして把握、認知してはじめて快となる。⁽¹²²⁾

斯くしてわれわれは驚きとしての *Saujaatoru* に二種を区別することができる。*Saujaatoru* は一般に何らか定常状態を逸脱するもの、それ故心に傾きを生ずるものであるが、『形而上学』劈頭での *Saujaatoru* は構造的にかかる不安定性のみを含み、それ故容易な理解を拒むものである。これに対し『修辞学』での *Saujaatoru* は傾きと共にその解消をも与えるもの、つまり知の即座の、若しくは極く近接した将来での実現を含むものである。前者は知の端緒⁽¹²³⁾、後者はその終局⁽¹²⁴⁾である。前者を仮に哲学的 *Saujaatoru*、後者を藝術的 *Saujaatoru* と呼ぶ。

第五章 再構成せられた *ḡauuatoú* 論を介した

『詩学』当該箇所の解釈

単に *ḡauuatoú* という同一語が用いられているというだけの理由で、前章で再構成されたアリストテレスの *ḡauuatoú* 論を以てわれわれの問題とする箇所、『詩学』1452a31-6 を分析してよいであろうか。もとより別の文脈での用例の語義をこの箇所に適用することは慎重さを要する。しかしここには *ḡapa tḡu dōsai—ḡapadōsōu* という共通の意味契機が見られるし、『詩学』が全体として藝術を知的側面から観察することが多いことと、『形而上学』、『修辞学』では *ḡauuatoú* が知と結びつけられて説明されていることを考え合わせると、context 上の隔りは小さいと見てよからう。⁽¹²⁾

顧みれば悲劇の知にとって *erōs* 即ち聴衆にとってのわかりやすさが重要な意義を持っていた。従ってそれに相克するように見える *ḡauuatoú* の存在意義は *erōs* と少くとも部分的には両立しようするような *ḡauuatoú*、更に言えば *eidōsa* を有効に機能せしめうる *ḡapadōsa* の存在意義に他ならない。つまり課題と共に解決をも含んだ藝術的 *ḡauuatoú* であることが予想される。以下順を追って分析を加えていく。

I ποῖπον καὶ ἔσενά

ποῖπον/ἔσενά はそれ自体恐ろしい／憐れむべき出来事であり、それに値せぬ人、そんな悲惨事に見合うことをしたわけではない人に不幸が襲うという納得し難さ、或る種の違和感を持つ⁽¹²⁵⁾。その意味では小さな δαυιδάρου である。

II τὰρὰ τοῦ ὄσεν

ὄσεν とは例えば、主人公は徳を持つ、従ってよい帰結を予期するという形で現われる⁽¹²⁶⁾。この ὄσεν に「有徳な人は幸福に至る」という通念的 ἐπέφα が大前提として機能している⁽¹²⁷⁾。丁度弁証法的並びに弁論術的推論の前提に ἐπέφα がなっている如く⁽¹²⁸⁾、悲劇でもかかる一般命題に従い（個別的）前件から（個別的）後件が予想として導出される。然るにこの予期は外れる。それは、ἐπέφα が他の仕方でありうるものに関わり、当然そうでない事例も生じうるし、又多くの因果系列が筋の表層、深層に含まれているからである。

いずれにせよ予期の失効は知の挫折による無力感を ὄσεν の主体に強いる。知的タームで言えば無知の自覚、感情的タームで言えば、説明されざるものへの本能的畏怖、不安、焦燥が生ずる。それ故これは第一の種類の δαυιδάρου、時間的に近接した解決を与えない構造を持つ哲学的 δαυιδάρου に相当する。

この知的、感情的震憾は、先行する出来事の再査定と、誤った予期を生んだ自己の知識と信念の体系の修正とを同時に強いる動因となるが、安定状態には至らない。自らを証しえぬ種類の格言の如く、これは直ちに解決を要求する。⁽¹²⁾

三 *παρὰ τῆς δόξης δι' ἀλήθια*

では *δι' ἀλήθια* がつけ加わった *παρὰ τῆς δόξης* ということはいかなる経験に対応しているのだろうか。*παρὰ τῆς δόξης* である所与の原因を求め悟性は出来事を回顧的に再査定する。そして多少の時間の経過において、又は殆ど同時に、よい結末を予期せしめたのと同じ出来事が実はハマルティアとして悪い帰結を生んだことを知るに至る。⁽¹³⁾ 原因の認識は不条理感を解消し、一定の因果連関に関する知識の適用の成功は自己の知的体系の有効性を再確認させる。これは原理的には傾きの解消、知の（再）獲得であり、構造的に謎と解決を一挙に提出するところの第二種の *δαιμονίου* に相当する。そして、隠喩の場合に類似が意想外であればあるほど知も大きく、従って快も大きいように、悲劇の場合も連関が意外であれば、それだけ快も大きい。*παρὰ τῆς δόξης δι' ἀλήθια* という条件を充たす筋の部分の一つであるペリペティアが、快とされる種類の *δαιμονίου* に入れられるのは、⁽¹⁴⁾ このように解決を内包するが故にである。

原典の *παρὰ τῆς δόξης δι' ἀλήθια* という外見上は互いに矛盾する二つの語句の接合は勝義の知を、そして藝術的 *δαιμονίου* を構成する二つの本質的契機——遠隔性と真理性——をそれぞれ端的に表明す

るものである。この *deuuarōis* にはこれら両契機の共在が必要であるが、それは、両契機が互いに調停されたという消極的なものというよりは、潜勢的因果連関としての *di' alhnia* を顕在化せしめる動者として *para tpu dōsau* が要求されるという積極的な意味に於いてである。*para tpu dōsau* と *di' alhnia* という両条件の外見上の矛盾がどう解消されるかというわれわれの第一の問い、及びなぜ *para tpu dōsau di' alhnia* が *deuuarōis* になるかという、第二の問いの前半部にはこれで十分答えられたこととしよう。徳を備え、善を目ざす人物が、それにも拘わらず誤りと破滅に陥るだけでなく、その徳と善が誤りと破滅の原因になってもいなければならぬ。⁽¹³²⁾

では *para tpu dōsau di' alhnia* による *deuuarōis* が何故恐れ、憐みを強めるのか——これはわれわれの第二の問いの後半部にあたる。確かに出来事が *di' alhnia* に生じたことを知ることは原因の認識を含むから、知のうちでも優れた種類に属し、その限りでは、理解し易い *epistō* をその相関者とする。*para tpu dōsau* による当惑に対し、*di' alhnia* 即ち隠されていた新たな連関の発見は、それはそれで一つの知を実現することであり、そこで知性は自己を再確認する。⁽¹³³⁾しかしこれは知の完全な復権、乃至 *katartōis* (常態復帰) を意味しない。なぜそのように言うのか。これは *para tpu dōsau* の *dōsa* とは誰の *dōsa* かという、われわれがここまで意図的に触れなかった問いに関係する問題である。今 *para tpu dōsau di' alhnia* を相関者とする知の構造を考えるにあたり、この問いを立てねばならぬ。

ところで一体に『詩学』に用いられた、思考や感情を表わす語句はその主体が登場人物なのか観客なの

か曖昧である場合が少なくない。一例として *παρὰλογισμός* (誤謬推論) という語が挙げられる。『詩学』中に二用例を数えるが、その第一のもの (55a13) は *ἐκ παρὰλογισμῶν τοῦ θεῶν* (「観客の行なう誤謬推論から」) と読むか、それとも *ἐκ παρὰλογισμῶν τοῦ θεῶν* (「登場人物のもう一方が行なう誤謬推論から」) と読むかによってその主体は異なってくる。第二の用例 (60a20) の場合、文脈的には *δουλιανὴν* や *ἀλογία* は聴衆にとってのそれであり、60a25 でははっきりと「われわれの心は誤謬推論を行なう」と記され、例としては聴衆の行う誤謬推論が挙げられるのがふさわしいのに、実際に出されるのはペーネローという登場人物の行うパラロギスモスである⁽¹³⁴⁾。

かように主体がはっきりしないということは、*δοξα* の語に関しても言える。*δοξα* は一体誰のものかという問いを考究する前提としてそれが *Scheinproblem* でなうことを先ず確かめておかねばならない。なぜなら、一般に *δοξα* の語には、その主体を特定することができず、当該集団の成員の大部分に受容されるに足るだけの拘束力を持つ通念、即ち非人称的な *δόξα* や *εἶδος* に近いものを指す用例もあるからである⁽¹³⁵⁾。しかし乍ら、もしそうであるなら、それは *κατὰ το ἐκτός* という条件に抵触せざるをえない。従ってこの *δοξα* は特定の人(々)の持っている個々の見解若しくは予期である。

さて誰の *δοξα* か、という問いに関して従来の学説は二つに分かれる⁽¹³⁶⁾。聴衆の *δοξα* とする説は、ここで問題になっているのが聴衆の心の中で生ずる過程であるという文脈的支持があるが、現実の悲劇現象に必ずしも合致せぬ短所を持つ。逆に登場人物の *δοξα* とする説は、聴衆が一般に登場人物の運命と悲劇の

結末を知っているという実際の悲劇現象⁽¹³⁾に合致するという長所を持つが、聴衆への作用を説明するのに、入感という一種の媒介項を置かねばならないという欠点を持つ。この問題の解決には、実際の悲劇現象を以て『詩学』を解釈することの是非という、一層大きな問いに予め答えておかねばならない。しかし乍ら『詩学』には、当時の悲劇から帰納的に法則を抽出する面⁽¹⁴⁾と、ジャンルの本質から演繹的に法則を導出する面⁽¹⁴⁾とがあり、論者は現段階に於いていずれとも決し難い。従って、三つの場合に分けて事態を分析せねばならない。

一、*δοξα* が聴衆のものである場合。 *κατα την δοξαν δι' ἀληθεια* に聴衆が気づくのはペリペティア乃至アナグノーリススのあとである。この場合主人公については、(a) *δι' ἀληθεια* に最後まで気づかないか、(b) *δι' ἀληθεια* にペリペティア乃至アナグノーリススのあとで気づくか、のいずれかである。

二、*δοξα* が登場人物のものである場合。 *δι' ἀληθεια* を聴衆はある程度先取することになる。その場合でも登場人物についてはやはり一で述べた (a) (b) 双方の場合が考えられる。

三、*δοξα* が、登場人物と聴衆の一致した予期である場合。これは一の (b) に等しくなる。

先ず (a)、即ち登場人物が出来事の原因を認知せぬ場合、彼には全く予想外のことが起こったという事実が残されるのみであり、知が成立したとは言い難い。次に (b)、即ち *κατα την δοξαν* の直後にその出来事の原因を知る場合、彼は結果が生じたあとではじめてそれに気づくのであり、その結果は——少なくとも彼にとっては——先行する出来事が指し示すいくつかの可能性、期待の束のうちでも

一層少なく蓋然的であつたものである。即ち知は確かに成立するが、それは他者から与えられるという、全き受動相に於いて成立するものであり、出来事が意想外に襲うということ自体に変わりはない。確かに無時間的観想⁽¹³⁾としてはそれでもよい。いつ知ろうとも、知ればよい。しかし行為に関わる実践的知性⁽¹⁴⁾ (*Odnoia praktichn*) にとつては知は失効したままである。

従つて一でも二でも、主人公の経験を共有している限りの聴衆にとつては (a) (b) いずれにせよ知は不完全、二の場合はそれでも冷静な観察者である限りの聴衆は、始めから結果を予見し、そこに一種のエイローネイアの成立する余地があるが、一の場合は、観察者である限りの聴衆の知も、登場人物のそれと同様不完全であるということになる。いずれにせよ知の複権は中途半端で、完全な自己確認には達しない。聴衆には確かに一つの知が実現されるが、それは、それへつき動かした不安定さを完全に解消しきるものではない。

この課題と解決の間に存在する過不足によって生じた空隙を充填するには、感情によるしかない。隠喩に感情効果がなく、悲劇にそれがあるのは、前者は少くともそれが成功している場合、謎の大きさに充分見合うだけの解決が提示されることによる。そしてその感情効果は、既に基礎条件によって与えられている恐れと憐れみに結びつき、これを強化する方向に働くと考えられる。ここでは知の对象的側面が、感情を分化する役割を担う。

斯くして悲劇の *tragediya* は、哲学的 *tragediya* と藝術的 *tragediya* の中間的性格を有し、それ

が悲劇の *ῥαυματόν* を爾余の *ῥαυματόν* から区別する徴標であり、われわれの第二の問いの後半に対する解答は、結局のところこれに求められる⁽¹⁴⁾。

註

- (1) 51a1—6 『詩学』については、ヘッカー版の頁数、行数のみで表記する。『詩学』のテキストは、本論文末の「参考文献」に挙げたカッセル校訂のものを原則として使用した。これはルカスの採用したテキストでもある。
- (2) T. I, p. 65—68 (頻出する文献については、このように「参考文献」に記した著者名略号のみによって表記する(1)とす。)
- (3) cf. V. II, p. 5; L. p. 126; Smyth, H. W. *Greek Grammar*. Cambridge, Mass., 1920, §2837.
- (4) エルスは、それ故、この前の部分で第九章を終え、ここから第十章を始めてくるほどである (E. p. 328)。cf. L. p. 126 (52a2)。
- (5) 52a6—7.
- (6) 52a7—10.
- (7) E. p. 336.
- (8) cf. L. p. 127; H. p. 164—165.
- (9) 52a19—20.

- (10) 53a15—16.
- (11) 例えば $\tau\alpha\iota\upsilon\mu\iota\sigma\iota\sigma$ (Tw. Note 83, p.285—286) $\rho\omicron\sigma\tau\alpha\tau\epsilon\iota$ (R. p.60) $\mu\epsilon\lambda\epsilon\sigma$ (E. p.343) $\mu\epsilon\lambda\epsilon\sigma$ (L. p.129) $\mu\epsilon\lambda\epsilon\sigma$ (Br. p.7) が $\mu\epsilon\lambda\epsilon\sigma$ である。cf. 金田 p.155 註 (31)。
- (12) cf. H. p.170—171; By. p.200; B. p.278—279; V. II, p.6—10.
- (13) 55a16—17.
- (14) 第十六章参照。
- (15) *Phys.* 2.6.1, 197a36—b2 (アリストテレスの著作の表記に際しては著者名を省くこととする) cf. *Met.* 1032a30ff.; 1034b5ff.; 1065a25ff.; 1070a6ff.
- (16) By. p.197 (52a5); B. p.180.
- (17) E. p.329; B. p.266—267.
- (18) 48b4—19.
- (19) 48b16—17. $\tau\omicron\upsilon\sigma$ *ὄφθαλμοῦ* *ἐκείνου* という語句は解釈の分かれるところで、そのままとれば、眼前にある再現と、眼前にはないが既に知っている再現対象とを同定することを意味しようが、これに対し $\kappa\omicron\upsilon\beta$ (C. I, p.218—219) は、かかる同定では何ら情報が伝えられず、従って知ることにはならぬのであるから、アリストテレスの言いたいのは、再現がその正確さと仕上げのよさによって、対象のままでは知らなかった面を知らせるということであるとした。ルカスも、対象を既によく知っている場合、その再現で学ぶところは少ないとし (L. p.72)、ハーディソンはこの部分を「この男はしかじかの類に属する」即ち前に見たことのない対象の持つ類的特徴を学ぶのであると解する。(H. p.92—95. cf. E. p.132)。
- 確かに $\langle\tau\alpha\iota\rangle$ が対象の本質を問う場合に用いられることを考えあわせると、この解釈も首肯しうるも

のを持つ。しかし乍ら、そう解すると、次の *επει εαν μη τύχη προσωρακώς, ούκ η μίμημα ποησαι την ψδουνη άλλα δια την απεσπρακται η την χρονων η δια τοαυτην τουα άλλην αιτίαν* という部分 (48b17—19) となすべく接合しなくなる。なぜなら、そのアリストテレースは快の二つの原因として再現(対象を前に見たことがある場合)と仕上げのよき等(前に見たことがない場合)を区別しているが、それらのうち後者をハーティスンが *μαυθαίνειν και συλλογίζεσθαι τι έκαστον, οίον έστι ούτος έκείνος* と結びつける (H. p. 94—95) のは、*τò χαίρειν τοις μιμήμασι ηάυτας* (48b8—9) 即ち、前者——再現が快の原因である——の理由を述べることか、*ναί* (48b12—17) で文脈的に要求されていることと整合しないことになるからである。

知 (*μαυθαίνειν*) の本質について光をあてるのは『問題集』の次の箇所である。

「それとも知ることが快いからであろうか。しかるに知ることが快いことの原因は、それが一方で知識を獲得することであり、一方でそれを用い、再認することである」とである (『*η έστι ψδου το μαυθαίνειν, τούτου δέ αιτίου έστι τò μεν λαμβάνειν την έπιστήμην, τò δέ χρῆσθαι και άναρρωδίζειν έατίω.*』 (Probl. 19. 5, 918a6—8))

(ii) では Flashar の解釈に従い訳出した。詳しくは、岩波書店『アリストテレス全集』第十一巻に於ける当該箇所への戸塚七郎の註を参照のこと。

ここは、未知の旋律よりも既知の旋律が歌われるのを聴く方が一層快いことの原因の一つを挙げる箇所であるが、*μαυθαίνειν* には、新たな知識の獲得という面と、既に獲得された知識の使用、即ち再認という面の双方が帰せられている。これは、眼前に提示されたものが既知のもの(の再現)であることを知ることが、一方で、眼前のものが何であるかが発見される限りで、又は眼前のものと既知のものとの関係が発見される限りで、知識の獲得であり、他方で、そこで見出されるものが既知のもの(の再現)

である限りで再認である、ということと解釈される。知は本性上この両面を持つ。無論 *μαρθαίνας* には、場合に依じてそのいずれか一方が強く現われることもあり、それ故アリストテレスも *μαρθαίνας* の語が「知識を用いて了解する」(τὸ συνέχεαι ἡρώμενον τῆ ἐπιτήμη) と「知識を獲得する」(τὸ μαρθαίνας ἐπιτήμη) の両義を持つ(ソクラテス Soph. Elench. 1, 4, 165b30—34) が、かかる両義性は *μαρθαίνας* の本質自体に由来する。

」)からして『詩字』の問題の箇所 *μαρθαίνας καὶ ἀλλοτριότητος τί ἐκείνου, οὐκ ἔτι αὐτοῦ ἐκεῖνος* (48b16—17) は、その絵がいかなる対象の再現であるのかを知ること、既知の対象自体について何事かを学び加えるというよりも、再現と既知の対象との関係を発見することを意味していると解釈される。

その際、同定される対象が、「」に描かれているのは「鷗だ」の如く普遍であるか、「これはアキレウスの絵だ」の如く個別であるかは問うところではない。ハーティスは、普遍、又は普遍と個別の関係にのみ知は関わりと言ふ(HI, p. 92) が、たとえば「定義」(*ὁρισμός, λόγος*) や「字」(*ἐπιτήμη*) がそうだとしても (cf. *Met.* 1036a28—31, 1059b25—27)、「推論」(*ἀλλοτριότητος*) は必ずしもそうではない。推論から個と個を同定する結論が生ずることもあることは、『詩字』中の次の言葉が示している。「第四は推論 (*ἀλλοτριότητος*) からのアナグノーシスである。例えば『コエポロイ』に於いてエーレクトラは「私に似た何者かがここに来た。然るにオレステース以外に似た者はいない。従ってオレステースがここに来た。』と推論するようだ。」(55a4—6)。

(20) コムはこのような類似的認識は偶然的なものとして、この契機を低く評価している (Gomme, A. W. *The Greek attitude to poetry and history*. Berkeley, 1954, p. 64—65)。しかしコールテンヤン—ディスンがカタルシスを「知的解明」(clarification) とする解釈を提出する際、論拠としたのが、『詩

(32) cf. E. N. 6. 4, 1140a1—2; 6. 5, 1140b2—3; *Rhet.* 1. 2. 14, 1357a23—27. 無論、行爲以外にも *eikós* の領域はある。例えば気象に於いて「真夏に高温と暑々の生ずるのは、常に、又は多くの場合にである。」(*Met.* 6. 2, 1026b34—35) と言われる。

(33) E. N. 3. 3. 10, 112b8—9; cf. 1. 2. 12, 1357a4—5; 6. 5. 3, 1140a31—40b2; *Rhet.* 1. 2. 12, 1357a4—7; E. N. 3. 3. 8, 1112b2—4.

(34) cf. E. N. 1. 2. 8, 1094b10—11; 1. 3. 4, 1094b19—22.

(35) 51a38.

(36) 『自然学』(2. 5. 8, 197a18—19) では *τοῦτο* が *πρακτικόν* であると言われるが、『詩学』では *διότιον* が *eikós* の矛盾概念として、詩に含む必要を規定されている。cf. T. I, p. 139.

(37) *eikós* と *ἀναγκάσιον* は並列すると論者は判断する。これに対し、藤田一美氏(『アリストテレスの詩学に於ける \langle τὸ εἰκόσ \rangle の問題』今道友信編『美学史研究叢書』第五輯 p. 1—37) は、*eikós* と *ἀναγκάσιον* が並列するものでなく、同一のものに関わるという。氏によれば *τὸ ποιητικόν* (作られるもの) は「他の仕方でありうるもの」に属するから、その原理は *eikós* であり、本来これに対立する *ἀναγκάσιον* は *ποικίλικη* に持ち込めず、従ってアリストテレスが *eikós* と *ἀναγκάσιον* を並列させるのは「問題」であり「矛盾」であると言ふ(p. 1—12)。氏はこの矛盾を「選択可能性の場としての *eikós* を、その結果として立てられた作品の必然的な意味、かたちとして *ἀναγκάσιον* が強意的に補うという考え方で解決しようとする(p. 12, 25—26)」。従って *eikós* と *ἀναγκάσιον* は並列するものでなく、「同じ事柄に関わる」(p. 31 註 52) ということになる。

論者の見るように、*μοῦσα* は二つの区別が必要である。一つは *eikós* と *ἀναγκάσιον* は詩人の語る意味内容としての出来事の従うべき様態であり、*ἐπιδεικτικῶν ἀλλόθεν ἔχειν* は制作行爲自体の様

相に関わるということである (cf. 竹内 p.151—153)。藤田氏は、他の仕方でありうるこの種の *ποιητόν* を作品乃至その対象と解している (cf. p.4—5, 16, 22) が、*ποιητόν* は *ἔργον* としての詩作品 *ποίημα* でなく、制作に於いて実際に行なわれべきことを指す (cf. E. N. 6. 2. 5, 1139b2—3; Bu. p.256, 'The process of production'; Di. p.445, Anm. 124, 4 'Hervorbringen als Vorgang'. 制作とその所産の區別については E. N. 6. 5. 4, 1140b6—7; M. M. 1. 34, 1197a3 参照)。もとより制作も又広義の行為であるから実践的知性の支配を受け (cf. E. N. 6. 2, 1139b1; 当該箇所への加藤の註)、そこから或る種の蓋然的法則を抽出することも可能であろうが、それは登場人物が或る蓋然的、必然的法則に則して行為するということ等とは別の次元に属する事柄である。従って、*εἰκόσ* は詩人の制作行為に關して用いられてはいないし、*ἀναγκάτων* は、作品の形が全体としてもつ、代替不可能性という意味に於ける「擬似必然性」を指すのである。

第二点には、*εἰκόσ/ἀναγκάτων* は當為^レ、*εὐδαιμόνιον* は存在に關わる *εὐδαιμόνιον* である。『詩学』に *θεῖ/χρηῖ* *νύσσ* の語が多用されている (e.g. 47a9—10. *κῶσ θεῖ σωίστασθαι τοὺς ἄλλοιους εὐδαιμόνιος καλῶσ ἔσεν ἢ ποιῶσ*) *νύσσ* からも理解される如く、創作技法論として、悲劇的理想型を描くところに、『詩学』の基本的性格は存する。*εἰκόσ* 又は *ἀναγκάτων* に則して可能なことを語ることも、その意味での當為に属する事柄である。これに対し、「他の仕方でありうる」とは、詩人の制作行為の存在様態を、それとして記述する言い方である。そうであるから、理想的悲劇の形として要求された規則に従うか否かは詩人の選択に委ねられている。そもそも「技術」(*τέχνη*) が「存在する *νύσσ*」^レ *νύσσ* にも可能なもの」(cf. E. N. 6. 4. 4, 1140a10—14) 先づ以て制作するかしなすかの選択が、次に制作する場合でも *εἰκόσ* や *ἀναγκάτων* を語るか否か、又、*νύσσ* かなる *εἰκόσ/ἀναγκάτων* を語るか、その他一切の選

扱が詩人に委ねられている。詩人の制作が選択に基くことを明示している箇所は 60b15—22 (b17 *proslēto*; 19 *prokēlēthai*) である。現実には生まれたギリシア悲劇の中で、アリストテレースの要求に充分適うものがむしろ例外であることも、ここで想起すべきであろう。

付言するに、この 60b15—22 と同じ箇所に関して D. J. Allan (Some Passages in Aristotle's Poetics. *Classical Quarterly*. 21. 1971, No. 1, p. 81—92) が、選択は正しいが力量の不足による誤りと、無知による選択の誤りという二分法を認める解釈にかえて、それらに故意の誤り(即ち意図的に誤りを選択すること)をつけ加えた三分法を認める解釈を提起している。

(38) 51b6—7.

(39) cf. B. p.166; H. p.152.

(40) 55a6—8; b8—12. cf. a18—19.

(41) 54a33—36. cf. 51a27—28; b8—9; 52a19—20, 23—24; 55a16—19; H. p.153—156; B. p.164—166.

(42) エルスは、詩的世界が結局われわれの日常的经验の世界であることを語っている。「アリストテレースの『実践的』世界——それは詩的世界でもあるが——は、われわれが一日一日と(from day to day)知って行く世界である。」(E. p.306; cf. H. p.155; K. p.88—89.) 従って、「蓋然性に反した仕方でも多くのことが生ずるのも蓋然的である」(56a24—25. cf. 61b15) という有名なアガトーン言葉に、アリストテレースは必ずしも共鳴してゐない。cf. 今道 p.190; B. p.183; By. p.254; H. p.239; L. p.193; V. II, p.61—62.

(43) cf. *Anal. Post.* 2. 2, 3, 90a14—19.

(44) cf. *Met.* 1. 1, 981a24—b10; 2. 1, 993b23—24; 2. 2, 994b29—30; *E. E.* 1. 6, 2, 1216b35—39. *De part. anim.* 1. 5, 4—5, 645a7—16.

- (45) 「なぜなら、一層多くのことが、そして一層しばしばその仕方であるならば、それは一層 *eikós* である。」と云う『修辞学』(2. 25. 11, 1402b37—1403a1) の言葉は、*eikós* が、その関わる出来事の発生頻度に相関してその程度を増すことを示している。この点で *eikós* は過去の経験からの一種の帰納的法則という面を持つ。
- (46) *tò eikós* が *tò πιθανόν* に極めて近い証左としては「可能だが納得し難いことよりも、不可能だが蓋然的なことを選択すべきである。」(*Ἐπιφανισθαί τε δεῖ πιθανὰ εἰκότα μάλλον ἢ δυνατὰ ἀπίθανα*. 60a26—27) と云う言葉自体、及びそれが後には「納得し難くても可能なことよりも、不可能だが納得しうることを選択せねばならぬ。」(*αἰσθητέρον πιθανόν ἀδύνατον ἢ ἀπίθανον καὶ δυνατὸν* 61b11—12) と云う換えられた語句が挙げられる。『修辞学』でも *tò eikós* *καὶ πιθανόν* と殆んど同義的に用いられる箇所 (2. 23. 22, 1400a8) がある。
- 尚、今挙げた「不可能だが蓋然的なこと」(*ἀδύνατα εἰκότα*. 60a27) をハーティソンは「通常は生じなぐ(又は生じえない)が、必然性又は蓋然性によって相互に関連せしめられたいくつかの出来事」(H. p. 270) と解釈している。それが正しければ、悲劇に於いては *eikós* が単発的出来事の生起の蓋然性としてよりも、むしろ因果連関の様態としてとらえ直されることの一つの傍証とならう。
- (47) 58a4—6.
- (48) *Rhet.* 2. 5. 1—2, 1382a20—32.
- (49) cf. B. p. 258—259; M. p. 54—57.
- (50) cf. *Rhet.* 2. 8. 2, 1385b14. *τὸ ἀραξίον*.
- (51) 従って、所謂「詩的正義」(poetic justice) 即ち一種の因果応報的観方を『詩学』中に読みとることは、むしろ私は考えてみる。cf. Br. p. 195; H. p. 118—119; B. p. 224—225; H.-G. Gadamer. *Wahr-*

heil und Methode. Tübingen, 1960, p.125. 「悲劇的結果の過重 (Übermaß) が悲劇的なものの本質に特徴的である」; W. p.240—248.

- (52) 何故なら「*παρὰ τῆν ὀψέων ἐν ἀληθία*と云う条件は、必ずしも全ての悲劇によって充たされるわけではなく、ただアナグノーリスとスリムティアから成り立つ「複合的」(*πρὸς ἀλήθειαν*, 55b33; cf. 52a12) 悲劇に於いてのみ充たされるのに対し、憐みは単純な悲劇に見出されることのあるからである」。
- (53) cf. 53b19—22.
- (54) cf. *Rhet.* 2. 8. 10, 1386a11—12; 竹内 p.140; By. p.222—223.
- (55) E. p.330.
- (56) cf. T. II, p.306—307.
- (57) 例えば、性格と結末の連関の知覚が、恐れと憐みを軽減するであろうハーティスマン (H. p.118—119) や、原因を知れば苦痛はある程度耐えられるものになる」というポトナル (Po. p.629) など。
- (58) cf. Longinus. 35. 5 「これに対し、予想に反するものこそ常に驚嘆すべきである」(*θαυμάσιον ὁ θμῶς αἰεὶ τὸ παράδοξον*)。
- (59) *νῦν τοῦ φ'* かかる効果は「スリムティアに於いても、それを欠く単一の出来事に於いても」(*ἐν δὲ ταῖς περιπέτειαις καὶ ἐν τοῖς ἀπλοῖς πράγμασι*, 56a19—20) 認められているからである。
- (60) *καὶ τὸ θαυμαστὸν ἀπὸ τῆς θαυμαστῶν ἐστίν* (cf. L. p.192. 52a20)。又、今道友信氏も「驚愕すべき事柄にこそその方がありそうであるとしてゐる (cf. L. p.192. 52a20)」。又、今道友信氏も「驚愕すべき事柄にこそ効果」と訳してゐる。(cf. 今道 p.67)。
- (61) cf. 60a13. *τὸ ἀλογον, ὅτι ὁ συμβαίνει μάλιστα τὸ θαυμαστὸν* 尤もこの箇所において「全て *τὸ θαυμαστὸν* は *τὸ ἀλογον* を介して生ずる」と言われているわけではない。少なくとも叙事詩に

於ては、*τὸ κλιότερον* が *τὸ θαυμαστόν* を生むのに最も有効であるとされていることである。そして *τὸ κλιότερον* 即ち合理的説明を拒むものは、アリストテレスの要求する *εὐκλόγος* ἢ *ἀναγκαῖος* に反するが故に、詩に於いては避けねばならぬとされる (cf. 54b6—7; 60a27—29; 60a34—60b1; By. p. 231 on 54b6; L. p. 166)。その正当化には特別の理由が必要で、詩の上位の目的に仕事を限りたのみ許される (cf. 61b14—15, 19—20)。

- (62) cf. 52a6—10; By. p. 197 (52a5); 本邦 p. 138; L. p. 127 (52a7)
- (63) 60a12, 13f., 17.
- (64) T. II, p. 294—296.
- (65) *ibid.*, p. 294.
- (66) *Rhet.* 1. 11. 1, 1369b34—35.
- (67) *Rhet.* 1. 11. 3, 1370a3—4.
- (68) *Met.* 1. 2. 8, 982b12—13.
- (69) *Met.* 1. 2. 8, 982b14.
- (70) *Met.* 1. 2. 11, 983a16—17 邦『形而上学』のハンズと W. Jaeger 校註の *Aristotelis Metaphysica*. (Oxford Classical Text) Oxford, 1957 (1973) を用いた。
- (71) *Met.* 1. 2. 8, 982b17.
- (72) *Met.* 1. 2. 8, 982b19—20.
- (73) 物事を知る手段が、或る種の驚嘆からの解放となるという点については、キナローも語っている (Cic., *De oratore*, II. 362)。
- (74) *Met.* 1. 2. 11, 983a11—12.

- (75) cf. T. II, p.294.
- (76) *Met.* 1.2.12, 983a18.
- (77) *Met.* 1.2.12, 983a19—21.
- (78) 言ふ迄ゆなへ' *δευιάδεν* 以後の常態がそれ以前の常態への「回復」であり、「復帰」であるのは、共に常態として同一であるという限りに於いてのみ言ひうることと' *δευιάδεν* の痕跡が知という形で残つていくという意味では、原状に復帰するわけではなく。対象が自己の知的地平に組み込まれること、対象も地平の方も共に変化する。
- (79) *Met.* 1.2.12, 983a19.
- (80) cf. *Met.* 7.3.6, 1029b3—8; *Top.* 6.4.2, 141a28—30; *Anal. Post.* 1.1.1, 71a1—9.
- (81) *Met.* 1.2.7—8, 982b11—13.
- (82) *Rhet.* 1.11.21, 1371a31—34.
- (83) *Rhet.* 1.11.23—24, 1371b4—12.
- (84) *Rhet.* 3.2.3, 1404b10—12.
- (85) cf. *Poet.* 22, 58a21—23; *By.* p.293 (1458a22); *Cic. Orator.* 97 (註重体が *admirari* の対象)。
- (86) *Rhet.* 3.2.6, 1404b28—31.
- (87) *Rhet.* 3.2.8, 1405a8—9.
- (88) *Rhet.* 3.10.2, 1410b10—15.
- (89) cf. *Poet.* 21, 1457b6—7.
- (90) *Rhet.* 3.10.3, 1410b19.
- (91) *Rhet.* 3.10.3, 1410b20.

- (26) *Top.* 6.2.5, 140a9. cf. *Rhet.* 3.2.1, 140Ab2; 3.2.13, 1405b7, 10.
 (27) *Rhet.* 3.10.3, 1410b20, 23.
 (28) *Rhet.* 3.10.6, 1410b33. cf. 3.10.4, 1410b22; 3.11.10, 1412b27.
 (29) *Rhet.* 3.10.6, 1410b33.
 (30) *Rhet.* 3.10.6, 1410b32—33. cf. 3.3.4, 1406b8—9.
 (31) *Top.* 6.2.5, 140a8—10 なお知は(知)は隠論の作り手ではなく、受け取り手の側に帰せられてくるものにも類似性を観察する(知)と(τὸ δῆλον καὶ ἐν τοῖς δέξουσιν θεωρεῖν) (*Rhet.* 3.11.5, 1412a12—13. cf. *Poet.* 22, 1459a7—8) べきこと、その場を以て「身近なるもの」なる自由にならざるものから隠論を作らねばならぬ」(*Rhet.* 3.11.5, 1412a11—12)。
 (32) *Rhet.* 3.10.4, 1410b21—24. cf. 2.22.3, 1395b25—27.
 (33) *Rhet.* 3.10.5, 1410b27—29. cf. 3.9.8, 1410a20—23; 3.11.9, 1412b21—25.
 (34) *Rhet.* 3.10.6, 1410b31—32.
 (35) cf. *Rhet.* 3.10.6, 1410b32—33; 3.11.5, 1412a11—12 (隠論); 2.22.3, 1395b25—27; 3.10.4, 1410b21—24 (ハントキーン) 更に *Probl.* 18.9, 917b8—11; *ibid.*, 18.10, 917b13—16 を参照のこと。
 (36) cf. *Rhet.* 3.9.8, 1410a21—22; 3.11.9, 1412b22—24. リキトと同様の理由で快くもつたのである (cf. *Rhet.* 3.8.2, 1408b26—29)。又一般にリキトを以てする(*Rhet.* 3.9.3, 1409a35—b4 「ヤブ」やリオドメトは「それ自体として始まりと終わりを持ち、見渡しやす、大きな力を持つ措辞である。かかる措辞は快いし、知り易い。無限定なものの反対であるために、そして聴き手が常に何かをもらえ、自分

のために何かが限定されていると考えるが故に快い。これに対し、何も予見せず、終結せぬことは不快である。尚、美が大きキヤと配列に存するといふ『詩学』第七章の言葉も、このこの連関で考えれば、構造体が「容易に全体を見渡せる (εὐθύνορος)」(51a4) ハ、易に記憶しうる (εὐμνημεινός)」(51a5-6) ハ、ハ、一種のよさをもち美が結びつけられるハと解釈しうる。

- (80) *Rhet.* 3. 10. 4, 1410b20—26.
 (81) *Rhet.* 3. 10. 4, 1410b21. cf. *Cic. Orator*, 134, motus cogitationis celeriter agnatus.
 (82) *Rhet.* 2. 23. 30, 1400b29—34.
 (83) *Rhet.* 3. 9. 3, 1409b4. cf. 3. 9. 2, 1409a32.
 (84) *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a31—32.
 (85) *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a28.
 (86) *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a27.
 (87) *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a22 ἀληθές; 3. 11. 7, 1412b8 ἀληθές.
 (88) *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a32.
 (89) *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a20—21.
 (90) cf. *Rhet.* 2. 21. 4, 1394b8—10; 2. 21. 7, 1394b28—29, 33—34; *Rhet. ad Alex.* 11. 1, 1430b1—6.
 (91) cf. *Rhet.* 3. 2. 12, 1405b3—5; 3. 11. 6, 1412a24—26.
 (92) *Poet.* 22, 1458a26—27. ΗΥ) ὁ ὑπάρχοντα ἀδύνατα の解釈をトノミン (Tw. p. 453) に従ふ。 cf. L. p. 209; H. p. 39; V. II, p. 264.
 (93) *Rhet.* 3. 10. 4, 1410b24—25; 3. 11. 6, 1412a32—33. cf. 2. 23. 30, 1400b32—33.
 (94) *Rhet.* 1. 11. 21, 1371a31; 1. 11. 23, 1371b5; 3. 2. 3, 1404b11—12.

- (111) cf. *Rhet.* 3. 11. 6, 1412a21—22.
- (112) 附言すれば、ハイローネニアヤシラドクサの持つ知的覚醒効果もこのことに基づく。cf. *E. N.* 4. 7. 14, 1127b25—26; *Plato, Apol.* 30c3—31a1; *Cic. Parad. St. Pr.* 4.
- (120) cf. *Rhet.* 3. 14. 7, 1415b1—2.
- (121) *Rhet.* 1. 11. 24, 1371b10—11.
- (122) *Poet.* 24, 1460a17 *to de de dyauparotou hōdōi*.
- (123) 今道友信氏はこの二つの *dyauparotou* の特徴を簡潔にこう言い表わしている。「学問も藝術もアリストテレースに於いては驚異をめぐる精神の営みである。ただし、哲学は *dyauparotou* (驚へんじ) 動詞) に始まり、藝術は *to dyauparotou* (驚へんじ) 名詞) をもたらす。」(今道 p. 208)
- (124) *dyauparotou* には「讚嘆する」の意味もあり、それをこの箇所に応用するとすれば、そのように見事に意想外の出来事を構成した詩人の腕前への讚嘆ということになる。しかし乍らそれでは、悲劇の恐れと憐みが悲劇の再現対象の側に関係づけられている以上、なぜ詩人の技量への讚嘆が恐れと憐みを増量せしめるのが説明できなくなる。
- (125) cf. *H.* p. 181.
- (126) cf. *N.* p. 445.
- (127) cf. *H.* p. 179—180.
- (128) cf. *Anal. Pr.* 2. 27. 1, 70a3—7; *Rhet.* 1. 2. 14, 1457a22—23, 28; 1. 3. 7, 1359a9.
- (129) cf. *Rhet.* 2. 21. 4, 1394b8—10; 2. 21. 7, 1394b28—29, 33—34.
- (130) cf. *N.* p. 443; *Br.* p. 195.
- (131) cf. *Rhet.* 1. 11. 24, 1371b10—12; *Poet.* 14, 1453b11—14.

- (132) cf. N. p. 443, 445.
- (133) 従って、悲劇には答えはなく、問いのみであるというナビールスキーとは論者は考えを異にする。
- (134) 60a25. cf. L. p. 228(60a25); H. p. 270.
- (135) e.g. *Poet.* 24, 1461b10; E. N. 1. 11. 1, 1101a24.
- (136) この問題は *reperireia* の語義解釈の問題とも連関する。なぜならヘリステイアが登場人物の予期に反して事態が転回することと解する人々(つまり「意図の逆転」説を採る者)は、その論拠として *παρὰ τῆς δόξας* が登場人物にとつてであることを用いるからである。例えばファーレン(V. II, p. 6—7), ナカシ(L. p. 131. 52a24—26) がどうである。尚、註(11)及び Br. p. 7 註(10) 参照のこと。
- (137) e.g. H. p. 163 (cf. p. 181); M. p. 89; E. p. 330 註(83), 345—347. 但しヘルスは *δόξα* をわれわれの予想とするが、それを *naiv* な意味には解さず、それが裏切られることの予期を伴う、距離づけられた予想を意味するとする。われわれが予め結末を知っている場合にも確かにこの意味での予想は外れるわけであるから、*παρὰ τῆς δόξας* といふことはいえるわけで、一つの解釈上の改善策ではある。しかしこう解された *δόξα* はもはや純粹にはわれわれのものでなく、事柄から普通に予想される成り行きという意味で、無名化、非人称化の途を辿ることになる。
- (138) e.g. V. II, p. 52; L. p. 133; L. 2, p. 52.
- (139) cf. *Poet.* 9, 1451b25—26; Br. p. 193 (51b25); L. p. 123 (51b26); Ra. p. 193.
- (140) これを松浦 (p. 5) 'ヘルス (E. p. 150) 'ナンチャー (B. p. 389—391) らは強調。しかしそう考えても、アリストテレスが考察の基礎とした悲劇がわれわれに現存する前五世紀のそれに一致するかという時代的懸隔の問題がある。アドキンスは、アリストテレス理論の関わる前四世紀の悲劇と前五世紀のそれには大きな違いがあることを立証している (cf. A. p. 89)。

- (11) これをルカス (L. p.139, 52b31)、『コーナン (G. p.48—49)』、『ハーティマン (H. p.61—62)』、『ラー (Ra.)』らに強調。
- (12) アナクノーリスは勿論ハリペティアの場合も、登場人物は事態の逆転自体は身を以て知る。しかし乍らそれに至る真の原因を常に知るとは限らない。例えば『ハッカイ』に於けるミンテウスの如く。
- (13) cf. *Met.* 12.7, 1072b13—30.
- (14) 実践的知性は過去に遡れなく (cf. *E.N.* 6.2.6, 1139b5—11)、『観想どなく行為が目的である (cf. *E.N.* 2.2.1, 1103b27—29; 10.9.1, 1179a35—b2)』。
- (15) かかる経験の共有は『M. p.90; L.2. p.52—55』参照。
- (16) cf. L. p.133 (52b7), p.292 (Appendix III); L.2. p.53; Ra. p.194.
- (17) 但し、それは悲劇の与える快の全体を説明するものでは、勿論なく。

参考文献

- A.: Adkins, A.H.W. Aristotle and the best kind of tragedy. *Classical Quarterly* 16, 1966, p.78—103.
- B.: Butcher, S. H. *Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art*. London, 1914 (Repr. New York, 1951).
- Br.: Bremer, J.M. *Hamartia. Tragic Error in the Poetics of Aristotle and in Greek Tragedy*. Amsterdam, 1969.
- Bu.: Burnet, J. *The Ethics of Aristotle*. London, 1900 (New York, 1973).
- By.: Bywater, I. *Aristotle On the Art of Poetry*. Oxford, 1909.

- C.: Cope, E. M. *The Rhetoric of Aristotle*. Revised and edited by J. E. Sandys, Cambridge, 1877.
- D.: Döring, A. *Die Kunstlehre des Aristoteles*. Jena, 1876.
- Di.: Dirlmeier, F. *Aristoteles Nikomachische Ethik*. Berlin, 1956 (Dramstadt, 1979).
- E.: Elze, G. F. *Aristotle's Poetics: The Argument*. Cambridge, Massachusetts, 1957.
- G.: Golden, L. Aristotle, Frye, and the Theory of Tragedy. *Comparative Literature* 27, 1975, p. 47—58.
- H.: Hardison, O. B. & L. Golden. *Aristotle's Poetics*. Englewood Cliffs, N. J. 1968.
- Ho.: House, H. *Aristotle's Poetics*. London, 1956.
- K.: Kassel, R. *Aristotelis De Arte Poetica Liber*. (Oxford Classical Text) Oxford, 1965.
- Ki.: Kitto, H.D.F. *Form and Meaning in Drama*. London, 1956.
- L.: Lucas, D. W. *Aristotle Poetics*. Oxford, 1968.
- L2.: id. Pity, Terror, and *Peripeteia*. *Classical Quarterly* 12, 1962, p. 52—60.
- M.: Moles, J. Notes on Aristotle, *Poetics* 13 and 14. *Classical Quarterly* 29, 1979, p. 77—94.
- N.: Napijalski, E. A. The Tragic Knot: Paradox in the Experience of Tragedy. *JAAC* 31, 1973, p. 441—449.
- Po.: Pottle, F. A. "Catharsis", *Yale Review* 40, 1951.
- R.: Rostagni, A. *Aristotele Poetica*. Turin, 1945?
- Ra.: Radt, S. L. Aristoteles und die Tragödie. *Memosyne* 24, 1971, p. 189—205.
- T.: Teichmüller, G. *Aristotelische Forschungen*. I, Beiträge zur Erklärung der Poetik des Aristoteles. Halle, 1867; II, Aristoteles Philosophie der Kunst. Halle, 1869.

- Tw.: Twining, T. *Aristotle's Treatise on Poetry*. London, 1812.
 V.: Vahlen, J. *Beiträge zu Aristoteles Poetik*. I, Wien, 1865; II, Wien, 1866.
 W.: Weisinger, H. *Tragedy and the Paradox of the Fortunate Fall*. Michigan State College Press, 1953.
- 今道 今道友信「詩学」翻訳及び註。『アリストテレス全集』第十七卷、岩波書店、一九七二。
 加藤 加藤信朗「ニコマコス倫理学」翻訳及び註。『アリストテレス全集』第十三卷、岩波書店、一九七三。
 金田 金田晉「ヘリベテイアヒアナグノーリシス——アリストテレスの『詩学』解釈のための一章——」今道友信編美学史研究叢書第四輯、東京大學文學部美学藝術學研究室、一九七八。一二七—一六〇頁。
 竹内 竹内敏雄『アリストテレスの藝術理論』弘文堂、一九五九（一九六九改版）。
 松浦 松浦嘉一『詩学』翻訳及び註釈。岩波書店、一九四九。